

Costume and Textile

No. 9

服飾文化学会会報

2005年3月

服飾文化学会へのお誘い

会長 石井とめ子

春まだ浅いこの頃ではございますが、日々の兆しに春の訪れを感じます。皆さまお元気でいらっしゃいますか。

昨年は前代未聞の自然災害や暗い出来事の多い年でしたが、世界の多くの国々が救助と復興に地球規模での善意あるヒューマニティーな活動を展開したことに瞠目させられました。被災された方々の平安を切に願っております。

服飾文化学会も創立から6年目を迎え、会員の皆様のご協力によって昨年12月、本学会から日本学術会議会員候補者2名の研究者を推薦いたしました。また同月、ホームページを立ち上げ、日本学術会議事務局へも登録いたしました。この開設

により学会活動の全容が迅速に広く一般社会へ向けて情報公開され、その結果、より身近に参加できることと同時に開かれた学会として真価が問われることとなります。

本学会の発展のためには会員を増やすと共に学会誌への投稿、夏期セミナー、例会、論文発表会など、学会活動に多くの方々にご参加くださることを切に希望しております。今後さらに皆さまの忌憚のないご意見を反映させて行きたいと思しますので、事務局までメールをお寄せください。

服飾文化学会 ホームページ アドレス

<http://www.fukushoku-bunka-gakkai.jp/>



論文発表会

卒業論文・修士論文発表会

日時 2005 (平成17) 年3月4日 (金)

13:00~15:30

会場 実践女子大学本館4階441教室
(東京都日野市大坂上4-1-1)

《プログラム》

開会の挨拶 服飾文化学会会長 石井とめ子

卒業論文

(座長 常見美紀子) 13:10-13:40

衣服の可逆性を探る

—new reversible fashion—

共立女子大学 内田 郁恵

東京と大阪の女子大生の色彩及びファッション情報の比較分析

大妻女子大学 赤木 潤子, 根津 迪子

(座長 長崎 巖) 13:40-14:10

日本におけるアクセサリ着用習慣と現代若者のアクセサリに対する意識

実践女子大学 藤屋 明子

袈裟—積尊の心—

日本女子大学 浅井 環

(座長 伊藤 紀之) 14:10-14:40

高島北海とアール・ヌーヴォー

杉野服飾大学 渡部 弘美

アートレースとクロスシュレースのウェディングドレス

和洋女子大学 岩佐 昌美

〈休憩 14:40-14:50〉

修士論文

(座長 小笠原小枝) 14:50-15:10

都新聞毎月付録『都の華』に見る明治時代後期の和装—実態と流行変化の解明—

共立女子大学 川末恵理香

(座長 塚田 耕一) 15:10-15:30

絵画における服飾表現の現実性について

—フェルメールの斑点入り白の毛皮をめぐる—

東京家政大学 三友 晶子

閉会の挨拶

懇親会 第4館2階カフェテリア



発表会終了後の懇親会

2004年度論文発表会の報告

実践女子大学 鍛島 康子

2005年3月4日(金)実践女子大学を会場として、恒例の論文発表会が開催された。発表会は、石井とめ子会長の挨拶にはじまり、卒業論文6編、修士論文2編の発表があった。参加者は50名余であった。今回、学生との連絡に電子メールを使用した。昨今、学生はほとんど「メールアドレス」を持っているので、全く混乱はなく事務連絡やプログラム、要旨の作成が容易にできた。さらに、学会のホームページによって、広く応募要領などが公表された。発表論文の概要は次のとおりである。

発表論文概要

1) 衣服の可逆性を探る—new reversible fashion—

共立女子大学家政学部被服学科 内田 郁恵

これまであるリバーシブルでなく、本来の意味を踏まえたリバーシブルの衣服のデザインをすることが目的である。そこで、衣服以外のリバーシブルの事例を収集・検討した結果、本来の意味を踏まえたリバーシブルとは「可逆性」として衣服のデザイン・制作を行った。

2) 東京と大阪の女子大生の色彩及びファッション情報の比較分析
大妻女子大学家政学部被服学科

赤木 潤子・根津 迪子

地域の違いによって被服の形態・色に違いがあるか?を目的に東京と大阪の大学を1校ずつ選り通学生生の観察,アンケート調査,雑誌による流行情報を資料として検討した。その結果,2004年の東京と大阪の色彩及びファッション情報には地域の差がなかった。

3) 日本におけるアクセサリー着装の習慣と現代若者のアクセサリーに対する意識
実践女子大学生活科学部生活環境学科

藤屋 明子

装飾品としてのアクセサリーは日本でいつごろから見られ,過去から今日までどんな意味をもって使用されているのか?これについて文献調査とアンケート調査を行った。この結果,日本では縄文時代からアクセサリー(宝飾品)をつけていたが,平安から江戸時代までつけられなくなり,明治以降,洋服の着用から再び登場した。現代の若者は「飾る」を目的にして,着装率が高いという結果が得られた。

4) 袷袷一積尊の心一

日本女子大学家政学部被服学科 浅井 環

袷袷は日本とタイやインドと異なっている。本来の袷袷とは何だろうか?資料として仏典を使用,積尊の人生の悟りと内容から探った。積尊の思想は,全ての執着を絶つことであり,自己の苦しみからの開放を助けることである。そこから,袷袷の布地,色がある。色を再現したが正確ではない。それは,積尊の言葉がいまだにはっきりしないからである。

5) 高島北海とアール・ヌーヴォー

杉野服飾大学家政学部被服学科 渡部 弘美

アール・ヌーヴォーに日本人の高島北海はどのように関わったかを探る。文献や作品集を集め,故郷の山口県に井上誠氏を訪ね,また,エミール・ガレの展覧会で作品を観察した。エミール・ガレの作品に東洋的思想が表れているのは,高島の影

響があるという。

6) アートレースとクロッシュレースによるウェディングドレス

和洋女子大学服飾造形学科 岩佐 昌美

レースのウェディングドレスを卒業制作として作成した。過去のレースにはポピンレースやニードルポイントレースがあるが,特別な技術と時間がかかるため,シルクの糸でクロッシュレースとアートレースを使用した。その結果,糸の特徴が生かされ,デザインも目的に合ったものができる。

7) 都新聞毎月付録『都の華』に見る明治時代後期の和装一実態と流行変化の解明一

共立女子大学大学院家政学研究科被服学専攻
川末恵里香

明治時代後期の和装(きもの)についての研究は多くない。そこで,当時の新聞の付録と現存の資料から,和装の実態と流行の変化を明らかにする。結果として,生地は縮緬が用いられたが,質感や重量感のあるものが好まれた。地色は暗く,濃い色。模様は伝統的な植物模様。明治35年からアール・ヌーヴォー様式が現れた。明治期後半のきものについての詳しい研究として評価された。

8) 絵画における服飾表現の現実性一フェルメールの斑点入り白の毛皮をめぐる一

東京家政大学大学院家政学研究科被服造形学専攻
三友 昌子

17世紀オランダの画家フェルメールの絵画に斑点入り白の毛皮が描かれている。市民の日常の場面でのアーミンを身に付けるのは疑問である。そこでどうしてアーミンの毛皮になったのかを調べた。当時の状況の中で3つの仮説をたて検討した結果,絵画作品から当時の服装の現実性を考えるのは慎重にしなければならないとの認識を得た。

以上,今回発表会の論文の内容を考えると,新しい考えや手法で衣服を創作したもの2編,アンケート調査により今日の着装状況を調査したもの2編,その他着るもの(袷袷)の心を探ったもの1編,アール・ヌーヴォーに影響を与えた日本人の

研究1編があった。修士論文では、1つは明治時代の日本、1つは17世紀オランダを舞台にした衣服の歴史的研究があり、いずれも力作で今後の研究が期待される。

発表会終了後、第4館2階カフェテリアで懇親会を行い、学生、先生との歓談で時を過ごした。約1時間過ぎたところで、能澤論文発表会担当理事の閉会の辞で幕を閉じた(参加者40名)。

研究例会の報告



ギャラリー・トーク 周防珠実氏

日時 2004年10月9日(土)

14:00~16:00

場所 森美術館

東京都港区六本木6-10-1

六本木ヒルズ森タワー53F

Tel 03-5777-8600

内容 「COLORS ファッションと色彩
: ヴィクター & ロルフ & KCI」展

14:00~ ギャラリー・トーク

<49F アカデミーヒルズ>

15:00~ 見学

<53F 展示会場>

<研究例会に参加して>

共立女子大学 野澤久美子

東京の新名所となった六本木ヒルズの中心部にそびえる森タワーの53階に森美術館はある。同フロアには都内が一望できる展望ロビーも併設されており、晴れていれば富士山も美しく見ることができる。あいにく当日は超大型台風が関東地方に上陸するという荒天で展望どころではなかった

が、10名の会員が参加し、京都服飾文化研究財団(KCI)のキュレーターである周防珠実氏、新居理絵氏を囲んで内容の濃い研究例会が行われた。

「COLORS ファッションと色彩: ヴィクター & ロルフ & KCI」展は、ファッションにおける「色彩」に焦点を当て、KCIが収蔵する近代西欧衣裳の中から厳選された約90点と、近年、世界的に注目されているオランダの2人組新鋭デザイナー、ヴィクター & ロルフの作品を展示し、色彩がファッションに付加する多様な意味の解明を試みたものである。今回ヴィクター & ロルフは、作品の展示と共にゲスト・キュレーターとして出展作品の選定や会場構成などのプロデュースも行った。

49階にあるアカデミーヒルズ講義室にて、周防氏により映像を交えたギャラリー・トークが行われ、また周防氏、新居氏には見学の際、展示品の一つ一つを丁寧に解説していただいた。京都服飾文化研究財団の収蔵庫には時代別に資料が並べられており、その時代の流れの中に色彩の流行を見て取れるという。

展示会場は、入り口から順に「黒」、「マルチカラー」、「青」、「赤/黄」、「白」の5つのセクションに分かれ、各室の内部はそれぞれの色で統一され、各色の衣裳が集められていた。各セクションの壁に設置された一面を覆うほどの大きなスクリーンではヴィクター & ロルフのコレクションの様子が音と映像で楽しめ、フロアには彼等の現代的な作品と18世紀の衣裳が並列されるという斬新な構成になっていた。

ヴィクター & ロルフは色彩をキーワードにしたプレゼンテーションをしばしば行っているが、初めは2001年の「ブラック・ホール」というタイ

トルで行った黒をテーマにしたショーであった。そこで今回の展示も「黒」から始まる。まさにブラック・ホールのごとく壁も床も展示資料も黒一色でごくわずかな展示照明と映像の光だけが照らしていた。「黒」の意味について周防氏は、「畏怖と魅力の二つの意味を持ち、それぞれ厳格さの表現として喪服や紳士服に、エレガントの表現としてイブニング・ドレス等に使われる。」さらに婦人服における黒の変遷について「西欧では16世紀には黒い喪服が広く使われるようになる。紳士服から発展した乗馬服は別として喪服以外の婦人服に黒を使うのは一般的ではなかったが、やがて19世紀後期に黒色やジェットといった喪服の要素がファッションとなっていった。1920年にシャネルが発表した‘プチット・ロブ・ノワール’は黒を女性の日常着に使用したことで黒のモダニズムといえ、21世紀末になって女性服の日常着の色としての地位を築いた。」と解説してくださった。1810年の黒の女性用乗馬服が展示されていたが、これは紳士服の仕立屋が製作したものだという。当時は婦人服と紳士服の仕立ては、それぞれの専門家に分業されていたが、乗馬服に関しては男性服専門の仕立屋が女性の服も手掛けた。

暗黒の世界から一転、「マルチカラー」のセクションは文字どおり鮮やかな多色使いで目に眩しいほどであった。フランスでプリント産業を発展させたオーベルカンプの夫人が1775年、王妃マリー＝アントワネットに拝謁した時に着用したという多色織りのロブ・ア・ラ・フランセーズは見事であった。アイボリー地に緑・赤・紫の複数の色調を使って花束と毛皮柄が織り出された絹ブロードが使われている。このような多色織りは当時非常に高価であったという。スキヤパレリの1937年のイブニング・ドレスは、当時人気のイラストレーター、マルセル・ヴェルテスによるデザインで、スキヤパレリのメゾンがあったヴァンドーム広場の塔に彼女の名前を入れて描き、店の宣伝を兼ねたというものである。ブランドのロゴ入りの製品は現在では珍しいものではないが、当時は他にない先駆的なアイデアであった。

「青」のセクションではヴィクター&ロルフの2002年秋・冬のパリ・コレクションでのクロマキー・ブルーのショーが上映されていた。これは、色をテーマにしたプレゼンテーションの一環で、映像加工の一種クロマキー処理をファッション表現に応用するという新しい手法である。クロマキー処理の際一般的に用いられるクロマキー・ブルーと呼ばれる鮮やかな青の服をモデルが着用して花道を歩くと、その姿が同時にその背面に設置されたスクリーンに映し出される。映し出された映像のドレスの部分にはクロマキー処理により、都会の雑踏や高速道路をせわしなく行き交う車の列、砂漠の連なりや羽ばたく鳥といった映像が流れ、動く模様のようなであった。クロマキー処理の映像はテレビの天気予報などでよくみられ、珍しいものであるが、服飾の模様としての使い方は斬新でそのアイデアに驚嘆すると同時に、現代ならではの面白い使い方として興味を掻き立てられた。

そのほか、「青」の衣裳として、元来西欧で青を染めるのに用いられていた大青を使った17世紀初頭のニット・ジャケット、後に東方から持ち込まれたインディゴを使った19世紀のドレス、1856年に初めて開発された化学染料モーヴのドレス、20世紀の化学染料による様々な色合いの青のドレスなどが一堂に展示され、時代による青色の推移を辿ることができた。

「赤/黄」のセクションにおいては赤色から黄色へのグラデーションともいうべき色合いの多様性をみることができた。ケルメス、コチニール、セイヨウアカネなどの天然染料のそれぞれ独特の赤色、黄の染料ウコンとの組み合わせによる橙系色、キバナモクセイソウで染められた鮮やかな黄色等々、服飾資料が染料の資料としても非常に重要であることを物語るものであった。

「白」は始まりの色、処女性を表すという。始まりの色をあえて最後に配置したのは、ここからまた出発という清々しい気持ちで会場をあとにしてほしいという思いからであるそうだ。白の衣裳は色彩という装飾がないためかレースやドレープと

いった部分が引き立っていた。なかでもヴィオネの1937年頃のウェディング・ドレスは綿密に計算された首から足下にかけて流れるようなドレープが非常に優美であった。

美しい色のまま保管されていた素晴らしい服飾資料にふれ、人々の新しい色に対する欲求と、そ

れに呼応する染色技術との関係に思いを馳せた。ファッションを時代の枠にとらわれず色で括って意味付けするという試みは興味深く、改めて色彩とファッションとの関係が非常に密接であることを実感した有意義な研究例会であった。

第6回総会・大会のお知らせ

開催日 2005年5月21日(土)・22日(日)
開催校 共立女子大学
〒101-8433 東京都千代田区一ツ橋
2-2-1
地下鉄神保町・竹橋駅下車

《プログラム》

5月21日(土)

13:30 研究発表

15:00 特別公演

1. 日本のきもの歴史

—小袖・きもの概要—

共立女子大学教授 長崎 巖氏

2. 松方コレクション、17世紀のタピスリー修復について

元メトロポリタン美術館染織品保存修復部
特別研究員、共立女子大学大学院博士後期
課程在学 石井 美恵氏

5月21日(土)

17:00 総会

18:00 懇親会

5月22日(日)

9:30 研究発表

展示発表 ショートスピーチ

13:00 見学会 泉屋博古館 分館

「特別展共立女子学園コレクション華麗なる装いの世界 江戸・明治・大正」

ギャラリートーク

同館学芸員 両角かほる氏

○第6回総会・大会実行委員会

実行委員長 伊藤 紀之

共立女子大学 被服意匠研究室

Tel & Fax 03-3237-2496

編集委員会からのお知らせ

服飾文化学会誌「Costume and Textile」Vol. 5 No.1がお手元に届いたことと思います。今回は論文7件、ノート5件が掲載されました。これまで一番多い掲載件数で、投稿者と査読者各位のご協力に、委員会として感謝いたします。

今後、より一層の質の伴った学会誌にするために、2005年3月4日の理事会で協議した結果、下記の内容が承認されましたのでお知らせします。

投稿期限を年2回とし、学会誌発行は年1回、従

来より1ヶ月繰り上げ1月31日とします。

具体的には、論文投稿申込みを7月31日と1月31日とし、投稿原稿の受付は8月31日と2月末日とします。投稿原稿の採否は逐次行なわれ、掲載可となれば、その結果が学会より投稿者に通知されます。

学会誌の発行は従来通りで、投稿の機会が年2回になりまので、是非投稿のご準備をお願いいたします。

*******展覧会案内 1*******

●「特別展 共立女子学園コレクション
華麗なる装いの世界 江戸・明治・大正」

共立女子大学 長崎 巖

明治19年(1886)に創設され、平成18年には創立120周年を迎える共立女子学園には、長年にわたって蒐集されてきた日本の服飾美術品や工芸品が多数収蔵されています。これらは、日本の歴史・文化・美術に関する教育資料として蒐集され、学生の教育に幅広く活用されてきましたが、これまで広く一般公開されることがなかったため、その存在はほとんど知られていません。しかし、内容の豊かさと質の高さは、博物館・美術館に匹敵するものであり、特に江戸時代から明治時代にかけての衣服類と装身具、漆工調度類は、保存状態の良さとその美しさにおいて出色といえます。



白綾子地松御簾模様打掛

江戸時代から明治時代にかけては、女性の服飾が最も華やかに展開した時代です。裕福な女性は、絞りや刺繍、友禅染などで美しく装飾された衣服を身にまとい、髪にはきらびやかな髪飾りをつけて、蒔絵で豪華に彩られた調度類に囲まれて生活していました。この時代の小袖と着物、髪飾りは、日本人の華麗な装いの歴史を美しく跡付けるもの

であり、これらとともに用いられた蒔絵漆工品も、また重厚で華やかな美の世界を現出します。

本展覧会においては、共立女子学園に所蔵される江戸時代の小袖や打掛・帷子・単衣、明治時代の着物といった衣服のほか、櫛・笄・簪などの装身具、また化粧道具や雛道具、屏風など、女性の服飾とその周辺を彩る工芸品を展示し、江戸から大正時代にわたる華麗な女性の装いの歴史を紹介いたします。



紅綾子地花束青海波模様打掛

会期 2005年4月2日(土)～6月12日(日)

※会期中一部作品の展示替えを行います

休館日 月曜日および展示替え期間

(5月9・10日)

開館時間 午前10時～午後4時30分

(入館は午後4時まで)

金曜日は午後7時まで

(入館は午後6時30分まで)

入館料 一般：800円

学生：500円

団体料金：2割引(20名様以上)

場所 泉屋博古館 分館

東京都港区六本木1-5-1

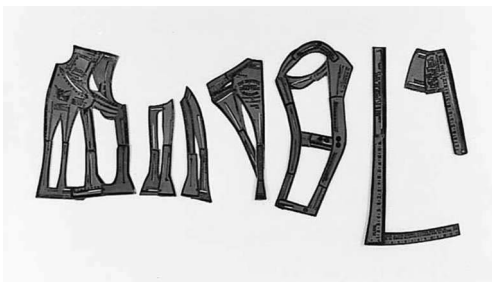
03-5777-8600 (ハローダイヤル)

<http://www.sen-oku.or.jp>

*******展覧会案内 2*******

文化学園服飾博物館

●「ドレスのかたち 立体 ⇄ 平面—1770～1960—」
会期 2005年4月20日(火)～6月7日(火)
私たちが日常着用している洋服は身頃、衿、袖などのいくつかのパーツが組み合され、立体的なフォルムを作り出しています。展示では18世紀のロココ時代から20世紀のオートクチュールまでの約200年にわたるドレスの歴史の中で、各時代のドレスが流行のシルエットを作り出すために、どのような形のパーツを組み合わせで作られているかに焦点をあてます。いくつかのドレスからは実物大の型紙(パターン)を作製し、立体のままでは見えない部分を探ります。



製図機

●「世界の絞り」
会期 2005年6月29日(水)～10月6日(木)
開館時間 10:00～16:30(金曜19:00迄開館)
*入館は閉館の30分前まで
休館日 日曜日・祝日・振替休日・夏期休暇・展示替の期間
入館料 一般500円(400円) ()内は団体料金
大学・高校300円(200円)
小・中学生200円(100円)
交通 JR新宿駅南口より徒歩7分
〒151-8529 東京都渋谷区代々木3-22-7 新宿文化クイントビル1・2階
TEL 03-3299-2387 FAX 03-3299-2602

*******お知らせ*******

■2005(平成17)年度論文発表会
開催日 2006(平成18)年3月4日(土)
会場 日本女子大学
東京都文京区目白台2-8-1
*詳細は、次号でお知らせいたします。

■第6回夏期セミナー
信州の上田、須坂方面で、8月9日(火)～11日(木)のうち一泊二日で実施する予定です。
講演・シンポジウム・見学会などを計画しています。詳細なスケジュールは後日お知らせいたしますので、お誘い合わせのうえご参加ください。

*******事務局から*******

★会費納入のお願い
2005年度の服飾文化学会会費6,000円を本年5月中に同封の払込用紙にてお振込み下さい。過年度未納の方もよろしくお願ひいたします。なお会費に関するお問い合わせは、本会事務局へお願ひいたします。

★服飾文化学会誌バックナンバー
1冊3,000円(税・送料含む)。購入希望の方は事務局へご連絡下さい。

会報 No.9: 2005(平成17)年3月発行
編集発行人: 服飾文化学会
事務局: 〒102-8357 東京都千代田区三番町12
大妻女子大学第三被服意匠学研究室
TEL: 03-5275-6029/FAX: 03-3261-8119
<http://www.fukushoku-bunka-gakkai.jp/>